

# 婦人と新社會

山田わか 主筆  
創刊号 (大正九年三月)  
第一六〇号 (昭和八年七月)  
全7卷 別冊総目次、解説付

五味 百合子 監修・解説

護るの會奉

母

クレス出版



# 『婦人と新社會』の復刻にあたって

日本社会事業大学名誉教授

## 五味 百合子

『婦人と新社會』は山田わか個人の評論誌として、わかを主筆に、夫嘉吉を編集発行人として一九二〇(大正九)年三月創刊され、嘉吉が発病した一九三三(昭和八)年七月第一六〇号まで刊行された。嘉吉は翌九年夏永眠したが、折柄母子保護法の制定問題が婦人運動の中心課題となり、わかを迎えられて委員長としての活動に入った。法制定までの数年間にわたる活動は相当精力的なものであったし、その上わか個人としても新たに社会事業の運営にもたずさわることとなった。

このようにわか自身の状況の変化や時代の激動の中でその評論活動は傾向を著しく変化させ、個人誌は発行停止のままとなり、著書の出版



サンフランシスコ在住の頃のわか夫妻。

もみられなくなった。しかし後世に指摘されることとなったそのいわゆる中庸穏健な愛国的保守的姿勢は時代に受容れられ婦人雑誌への寄稿や各方面への講演等に、大きく活躍の場を拓けた。

さて『婦人と新社會』創刊は平塚らいてうの新婦人協会の発会と時を同じくしているがわかはこのに参加せず、わかと嘉吉は独り舞台で読者とじかに語り合い共感し合いたい希望と期待をこめた小誌の発刊にふみきったものである。

創刊のことばの中でわか、男女ともに女のすぐれた価値を知るべきであるという指摘を行ない男女の関係は通俗的にとりあげるのではなく科学的研究態度を持たなければならないと強調している。さらに婦人問題を女権の問題であるとするのは誤りであって男と女は元来が違うものであるから力を合わせ、愛をもって家庭をつくり、愛ある家庭こそが社会の基礎、国の単位であるとし、婦人問題は愛であるという主張を掲げている。社会活動の原動力は男女間の愛、親子の愛であるというこの素朴な論理がわか自身の生涯をかけての主題であり、その後の活動も所論もすべてそのバリエーションであったということが出来る。

生涯を通し心の暖かさを示したわかが生がわれわれに示すものは限りなく人間性にみちたものであるが、ただ嘉吉が世紀をはさんだ欧米放浪時代多くの思想に触れた知友との交流の中で、科学的なものをもどるのうに受けとりこれをどのようににわかにはややはかりがたいものがある。これらの考察は「解説」にゆずりたい。

### 推薦の言葉

#### 意味深い復刻

#### 『婦人と新社會』

日本女子大学教授

一番ヶ瀬 康子

山田わか、代表的な日本の母性主義者であり、家庭重視の人である。しかも庶民の生活のなかで、その悩みと共鳴、共感しながらの相談活動に当り、そこから多くの女性に生きる力を与えてきた。その山田わか主筆の『婦人と新社會』が、今、復刻されることは、きわめて意味深い。ともすれば見失われがちなきざまな女性の群像を、そしてその中に共通する女性の悩みを、また在り方を明解にする意味において役

にたつ。

今日、男女平等か母性かではなく、男女平等の基盤のうえに、改めて母性と父性の在り方が問われていることを考えるうえに、多くの示唆がえられると思うからである。ことに山田わか

的には豊かになってきたそのなかで家庭が崩壊し、子どもたちが犠牲になってきているからである。いろいろな意味においていま一度、山田わか願ったものは何か、その真随を積極的に知ることに意味は、今日決して小さくない。解説者も、直接、山田わかを知り、深い関わりをもつてこられただけに、期待される。今回の復刻が、ひろくそして深く、人々の手と心にとどくことを望んでやまない次第である。

#### 忘れられた偉人

#### 山田わか先生

劇団文化座 俳優

鈴木 光枝

山崎朋子原作「あめゆきさんの歌」を上演する中で、わか先生に近い婦人の方々から取材に協力して頂いた。そして沢山の資料に押しつぶされそうになっていた時山田家に残っていたごくなられる少し前にNHKで放送された唯一のテープを聴くことが出来た。その話振りは、ゆつたりとした人間の大きさ、大きさがにじみ出ていて、わか先生の実在を感じることが出来る、それまでもう一つ生理的に肉付け出来ない、た役作りの苦しみからパツと解き放たれた思い

であった。

沢山のエピソードの中で先生を髣髴とさせるのは、お宅の二階で婦人達の会議がある時などほとんど発言されず、皆の舌戦をニコニコと聞いていられた、最後に「じゃ、それでいわね、そう決めましょ」と結ばれる人間の大きさ。その上皆で合意したことの実践となると二十貫の巨体をものともせず歩き、母子寮建設の際は廃品回収の屑の車まで引いて歩かれた。「お房さんには何時でも食べられるように」と、上京したての市川房枝先生や、平塚らいてう先生出産当時も随分世話をされていた。朝日新聞社で身の相談をされていた頃地方から駆け込んで来る婦人を常に六、七人も家に置いていたのに、自分はふだん着の浴衣を二年目は洗い張り、裏返して仕立直して着る質素振りだった。アメリカ時代、地獄に落ちた人間の醜を見すえ愚をなめつくしたことが鍛え抜かれた鋼のしなやかさとなり、一生ぬぐえない痛みを抱き持ったその後の人生が、お観音様のような人間の可能性の究極の姿かと思われる歩みをされたように思われる。

公演を終って私が何とも納得出来なかったのは、現代の日本の女性史の中ではほんの少いスペースでわか先生の仕事の事実だけ書かれていることだった。それがこの度の出版で、世界にも例のない偉大な日本女性の存在が世に出ることになると思うと泣きわめいて走り廻りたい程の感激で身がふくれ上る思いである。



# 山田わか略伝

山田わかは一八七九（明治一〇）年二月神奈川県久里浜に浅葉家の三女として生れ、一八九〇年三月尋常小学校四年を卒業した。向学心に燃えていたが父の、女に教育は要らぬという方針によつてその希望は斥けられ一七歳にして結婚させられたが間もなく離婚となった。

傾いた家産に苦しみ長兄をたすけたいと横浜に出たとき女衞の手にかかり渡米、シアトルの娼館に売り渡された。一八歳のときといわれ、数年のうちにシアトルの新聞記者にたすけられて劇的逃走を敢行してサンフランシスコの保護施設キヤメロンハウスに身を寄せた。はじめてキリスト教に触れ洗礼を受けている。その地で塾を開いていた山田嘉吉の許に通い、いづれからの学習をはじめ、のちの評論家として再生の基礎をきずくこととなった。

一九〇五（明治三八）年、一四歳年上の嘉吉と結婚したが翌年サンフランシスコ大震災に遭つて帰国を決意し、わかには十年ぶり、嘉吉には二十数年ぶりの故国に帰つた。



夫・嘉吉と結婚した26歳頃のわか。

夫妻は東京四谷に居を定め、嘉吉は得意の語学を生かして塾を開き大杉栄など知名の弟子を集めたが、わかもともに研鑽をつづけた。一九一三年わかは大杉の紹介で平塚らいてうを知り、『青鞥』に寄稿をはじめた。

ことを契機として次第に女性論壇の人となつて行った。一九一八年から一九一九年にかけて繰広げられた「母性保護論争」には、その独特の母性主義を持つて論戦に加わつた。



評論家として講演するわか。

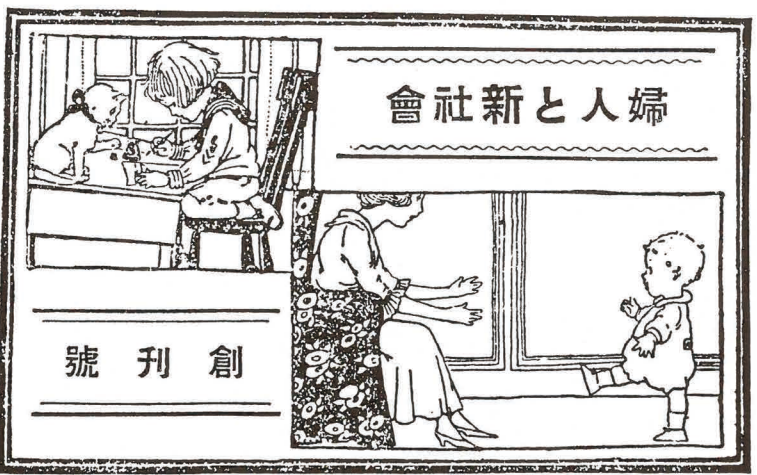
らいてうが青鞥後の長い沈潜から立ち上つて奥むめお、市川房枝らによびかけて新婦人協会を結成した一九二〇年、わかはこのに加わらず個人評論誌「婦人と新社会」を創刊し、一九三三年七月第一一〇号まで発行をつづけた。

一九二二年五月には東京朝日新聞女性相談欄解答者となり、誌上の健筆がうたわれた。一九二四年七月嘉吉永眠、七〇歳であった。折しも打ちつづく東北・北海道大凶作の状況下で娘の身売り、母子心中の多発という事態に婦人運動関係者は母子保護法制定運動を興し、わかを委員長として活発な活動をすすめ、一九二七年戦時立法の一つとして法の実現をみた。

一方でわか個人の事業として「母をまもるの会」を創設し母子寮や保育所をつくり夫や父を失つた母子の生活をまもる実践に入つた。わかの家族、妹や養嗣子がよく協力して、これらのしごとは戦後につづき今日も養護施設として継承されている。

戦時下のわかの言論活動はきわめて愛国的な役割を果すこととなった。しかしながら戦後、公的責任を問われることにはならなかつたが、社会的活動を再開するエネルギーは回復することなく、社会福祉実践のほかに社会の表面にあらわれることも少なく、一九五七年九月七七歳の、波乱に出生した生涯を静かに閉じた。

（五味百合子）



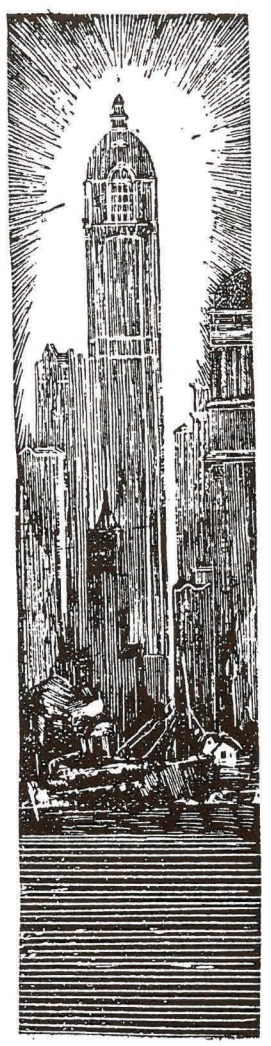
第十一号（大正十年一月）

今迄は男と女が別々な道を歩いてゐました。兩者の間の懸隔が餘りに甚だしくて男女は夫婦となつても手をつないで歩く事が出来なくなつてゐました。毎日タヤーン屋根の下に住んでゐながら夫は妻を理解せず妻は夫を知らずに過してゐました。

男が無暗に手足を伸して、極端に専門になつてしまつて本當の人生其のものに付ひて考へて見る事もなくなつてゐる時に、外的に伸びる餘地を阻まれてゐた女は持つて生れた精力をじいツと内部に蓄へてゐました。そして、大部分の男が忘れてしまつてゐた本當の人生をしっかりと見つめてゐました。

實質から云ふと男の持つてゐるものよりも女のもつてゐるものの方が遙かに貴い價值あるものであるにも拘らず男は勿論其れを認めません。女自身も其れを知らずにはゐました。

女は先づ其れを知らなければなりません。男は其れを認めなければなりません。そして、男と女は手をつなぐなければなりません。



## 母性の革命

どんなに立派な議論があつた處が、婦人の権利がどんなに確立された處が親や教師の云ふことを聞かない、少しも本能を教育されてゐない子供が續々と各家庭から社會へ流れ出て來る以上は社會は斷じて改良されません。

母が無思慮で幼児のシツケと云ふことをしない結果は、つまり、子供の本能の教育を怠つてゐる結果は、子供は母の膝を離れるようになるとすぐに障子をひきさきます。障子を自由にひきさかせて、ものを大切にすること、責任と云ふことを教へ

### 別冊総目次

第一号（大正九年三月一日発行）（三月号）	家庭と家屋と文明と	24
『婦人と新社会』を発行するに就いて	内外時事評論	19
婦人と社会	原首相と議會解散／急業問題／米國大統領候補者	2
家庭婦人の意義／恋愛と結婚／家庭の倫理的な作用	フーヴァア氏と欧州／露國過激派政府の財政／堀切氏と學問の獨立／紐育サン紙の議會解散觀	5
文化と文明	美学の真髓	2
心のかげ	氣候と労働	37
普通選挙	心のかげ	42
海外時事評論	落穂集	30
戦時労働婦人の末路／中流階級同盟／亞米利加の禁酒問題と佛蘭西／暴利取締としての公定物価	血色の文字	37
落穂集	編綴を終りて	49
血色の文字	第三号（大正九年五月一日発行）五月号	51
編綴を終りて	婦人の解放とは	57
第二号（大正九年四月一日発行）四月号	所謂婦人の解放と其の結果／愛情の大きさが人物の大きさ／愛情が主人で智力と技術は其の道具／母の愛があらゆる善の源／眞の意味の婦人の解放／所謂女權の拡張は母心を輕視し愛情を貧弱にする／従來の所謂家庭婦人／現代の婦人は三種の木にたとへらる／男子の政權乱用／婦人參政權／理	2
『婦人と新社会』総目次		5



山田わか主筆『婦人と新社会』全7巻構成

第一巻	創刊号〜第10号（大正9年3月〜大正9年12月）
第二巻	第11号〜第22号（大正10年1月〜大正10年12月）
第三巻	第23号〜第34号（大正11年1月〜大正11年12月）
第四巻	第35号〜第45号（大正12年1月〜大正12年12月）
第五巻	第46号〜第93号（大正13年1月〜昭和2年12月）
第六巻	第94号〜第129号（昭和3年1月〜昭和5年12月）
第七巻	第130号〜第160号（昭和6年1月〜昭和8年7月）

※小社では完全復刻をめざしておりますが、平成四年十一月現在、第48号（大正13年3月）の7〜10Pの確認ができておりません。『婦人と新社会』第48号をご所蔵の方がいらつしやいましたら、小社までご連絡下さい。

✦造本体裁：B6判／上製函入／クロス装  
✦刊行予定、定価（分売不可）

平成五年二月二十日  
揃定価九二、七〇〇円（本体九〇、〇〇〇円）



孫、彌平治をおぶっているわか、昭和6年頃。

クレス出版好評既刊書

「家族・婚姻」研究文献選集

全38巻／別冊解題付 湯沢雅彦監修  
人類社会において永遠のテーマであり、現在一般の関心も高い「家族」の問題を、それに係わる婚姻、親子、婦人、離婚等を含めてあらゆる分野から研究できるように精選集成したもの。  
戦前篇 全15巻／別巻1 総七、八二〇頁 揃価一五八、六二〇円  
戦後篇 全22巻 総七、六九六頁 揃価一八六、四三〇円

家庭教育文献叢書

全18巻 石川松太郎監修・解説  
家族が家庭で子どもに基本的な養育と社会化を行う「家庭教育」は、子どもの人格形成に重要な役割をもち、教育の基本である。明治より昭和20年（終戦）まで発表された家庭教育を中心に、女子教育・幼児教育・生涯教育等の史料を纏め復刻。  
A5判／総七、一五〇頁／揃定価一七五、一〇〇円

戦後婦人労働・生活調査資料集

全26巻／別冊附録付 高橋久子・原田冴子・湯沢雅彦監修・解題  
昭和22年に労働省婦人少年局発足以来刊行されてきた「婦人労働調査資料」「婦人関係調査資料」を中心に生の貴重な調査資料を纏め、民主主義社会における戦後30年の婦人労働の実態や婦人の生活と意識を伝える——日本女性史の貴重な証言集。  
B5判／総一一、四六〇頁／揃定価三五〇、二〇〇円

女性日本人

全12巻／別冊総目録、解題付 佐藤能丸監修  
婦人総合雑誌として三宅雪嶺が主宰し、大正九年九月に創刊、大正十二年九月の終刊まで全三八冊が刊行された。婦人参政権・男女平等・生活改革・恋愛と貞操など多方面に目配りした重要な問題をとりあげている。また大正後期の文学状況を知るに不可欠な資料。  
A5判／総七、九〇〇頁／揃定価一八〇、二五〇円